



近年、公立美術館の予算が無いために多館のコレクション展を行っているため軽んじられているが、本来ギャラリーコレクション展とは、一つのコレクターなり一つの機関が集積した、いわば思考回路の一つであるからとても重要な展覧会である。特に今回は個人であるために、ギャラリー睦の動向、傾向、方法が透けて見える。

今回出品された作品は菅井汲（1919-96）のリトグラフが一点、マドハット・カケイ（1954-）のミクストメディア三点と木版が六点、ベルナルド・ピュッフェ（1928-99）のエッチングが一点、吉永裕（1948-）の紙にパステルが三点、ジャン・フォートリエ（1898-1964）が一点、池田満寿夫（1934-97）のリソグラフ三点一組が一点、計18点である。版画が中心でも、堂々としたコレクションだ。

カケイと吉永が若いとしても、全員、世界で活躍する/したアーティストである。抽象、具象と分けて考えたとしても、共通する主題は人間を描いていることにある。喩えそれが人間の形をしていなくとも、人間が持つ意思を深く画面に掘り込んでいる作品ばかりだ。それをモダン絵画という枠に押し込めることは出来ない。何故なら、これ程までに人間を、その時の歴史を、無限と化した地球上に生息する人間の空間性を閉じ込めた作品は、モダンという時代でなければ考察できなかったという矛盾を背負っている。

また、「世界で活躍する」という言い回しにも気をつけなければなるまい。この国の美術界では「世界で活躍した」ことが条件となっている。睦でコレクションされている作家は、この条件を満たすために活動したのではない。個々が世界を周り、自ずと生まれた評価である。この評価こそ古き良き時代のモダニズムと言っても言い過ぎではないだろう。世界的な大戦後、病んだ心の復帰のために美術は役割を果たした。今はどうであろうか。総てが商品としてその役割を終えている。商品から脱却する術を学ぶには、最も敵対したモダニズムから学ばなければならない皮肉に、我々は何処まで耐え、超克することが出来るのかに芸術の未来は託されている。

今回のコレクション展がステップスギャラリーで行われたことに、大きな意義が発生する。睦のコレクションが睦以外で展示されることによって、また別の視角を携え、新たに命が吹き込まれたこともあるのだが、ステップスギャラリーという先鋭的な現代美術のみを扱うギャラリーにモダニズムの作品が展示されることに、我々は何を学ぶべきなのか。現代美術はモダニズムの残骸ではない。地続きで行われている果てしない闘争に、我々は位置していることを忘れてはならない。我々は、現代美術を現代に創造していると思込んではいならないのだ。若い美術者が多く集うこの場所で、この思いが伝わることを私は切に願う。

